

「世界へ」を合言葉に 進める国際理解教育

次代を見据えた時に、
どのような教育活動が必要となるのか。
先進的な活動を行う
さまざまな事例を通して考える新コーナー。
今号は、授業だけでなく、日常生活や行事にも
英語でのコミュニケーションを取り入れて
国際理解教育を進める学校事例から、
これからのグローバル教育を考える。

School Data



東京都渋谷区立松濤中学校

◎ 1949 (昭和 24) 年開校。専属ALTは4人。
ALTと学校間の通訳、書類の翻訳などを担う
コーディネーターを非常勤で配置。2013年度
にコミュニティスクールとなる。

校長 鈴木富樹 / 生徒数 207人 / 学級数 6学
級 / 所在地 〒150-0046 東京都渋谷区松濤
1-20-4 / TEL 03-3469-2451

URL <http://academic1.plala.or.jp/shoto/>

東京都渋谷区立松濤中学校

「Good morning.」
「Good morning, everyone. Today is...」
渋谷区立松濤中学校の1日は、英語のあ
いさつで始まる。朝の学活は担任とALT
が一緒に行い、英語で連絡事項を伝える。
続いて、15分間の「Morning Lesson」だ。英
語科教師またはALTが各学級に入り、日
替わりのテーマ学習を英語で進めていく。
授業中も、生徒は英語をよく使う。英語

以外に、実技4教科の授業は、教科担当と
ALTのチーム・ティーチングとなる。例
えば、音楽では英語の歌を合唱し、家庭科
では英文のレシピを見て、英語で指導を受
けながら調理する。そして、給食、清掃、
帰りの学活も、ALTと生徒は共に活動を
する。そこでのALTとのやり取りは、も
ちろん英語。雑談も冗談も、生徒は全て英
語で受け答えをする。更に、帰りの学活で、

生徒は「Class Planner」(連絡帳)に1日
の振り返りと連絡事項を英語で書く。
このように、同校の生徒は日常的に英語
を聞き、話し、読み、書く。毎日、ALT
を相手に英語を使うことによって、生徒は
英語での受け答えに慣れていき、やがて自
信が付き、学校行事で外国人と話す機会が
あれば自ら話しかけるようになる。ALT
の Andrew Hinkinson 先生はこう話す。

「日本の中学生はグローバル人材になれ
る素質を十分に持っていると思います。た
だ、世界に出ていくには、少しナイーブだ
と感じています。本校の生徒は私たちALT
と毎日話しますし、学活では企業のビジ
ネスミーティングに出てくる英語を使いま
す。生徒は、アカデミックな英語だけでは
なく、コミュニケーションのための英語を
学び、経験を積んでいます」

集団活動の中で英語を使う

松濤中学校は、2004年度に渋谷区英
語教育重点校、11年度に国際理解教育推進
校の指定を受け、「誰もが喜んで英語を学
びたくなる学校」を掲げて教育活動に取り
組んできた。まず、英語の授業は日本人教
師3人、ALT4人で全6学級を担当。週
4時間の授業は日本人教師とALTのチ
ーム・ティーチングで、2時間は日本人教師
メイン、2時間はALTメインとなる。ク



渋谷区立松濤中学校校長

鈴木富樹

「生徒の視野を広げるために、さまざまな活動を設けていきたい」



渋谷区立松濤中学校

Andrew Hinkinson

イギリス出身。同校に赴任して8年目。「Small steps will go big distance, keep going!」



渋谷区立松濤中学校

Ryan Carter

アメリカ出身。同校に赴任して1年目。「Important to be believing yourself and follow your heart instinct.」

ラスは本人の希望によるものだが基礎と応用の習熟度別となり、1クラス約20人の少人数で行う。

英語教育と共に、外国や日本の文化の理解、共生する態度、自己発信能力の育成にも力を入れる。学校行事の大半は外国人や外国文化とかかわる内容で、弁論大会や英語劇などの発表の機会も多い。例えば、3年生で行う京都・奈良の修学旅行では、立命館大の協力を得て、同大の留学生が1班に2人付き、一緒に京都を観光する。校外学習ではユニセフハウス（2年生）やJICA（3年生）を訪れたり、歌舞伎鑑賞や能楽鑑賞を行ったりと、外国や日本の文化・社会を学ぶ機会を設ける。鈴木富樹校長は、そのねらいを次のように説明する。「国際化が進む社会で、生徒が社会に出る頃には、外国人と一緒に働くことや、隣



写真 ミクロネシア（マーシャル諸島共和国、ミクロネシア連邦、パラオ共和国）の小中学生と教員計80人との1日交流の様子。小中学生と教員が10人ずつ分かれてクラスに入り、授業を行い、給食を食べる。午後はミクロネシア各国と日本、それぞれの伝統芸能を発表する

に外国人が住むことは普通になっているでしょう。そうした環境で自分の考えを伝えるためには、相手が理解できる言葉で話すことはもちろん、相手への思いやりも大切ですね。集団で、しかも英語を使って活動に取り組む中で、そうした力と態度を育てたいと考えています」

国際理解の視点はどの教科にも関連することであり、教師全員が目的意識を共有し、自己改革をしながら教育活動に当たれるのも大きな強みだと、鈴木校長は強調する。

少しずつでも対話の積み重ねが重要

同校は、かつて生徒数が50人を切る時期もあったが、国際理解教育の取り組みが周知された今、入学希望者が入学定員を超えるようになった。同校の教育目標「世界へ松濤中生」は、現行課程となる際、21世紀にふさわしい目標に変えようと、生徒自ら案を出し生徒会で決めたものだ。このことから、生徒が世界を強く意識している様子が見え、英語力も高い。例年、英検を全校生徒の8割程が受験。卒業までに約半数が準2級以上を取得している。また、将来的に留学したいという生徒が6割を超えた年もあったという。

こうした成果は英語教育重点校だから得られたものかもしれない。ただ、他地域でA L Tの経験があるRyan Carter先生は、

こう指摘する。

「現在では1人のA L Tが地域の数校を受け持つシステムが主流ですが、これではA L Tと生徒とのコミュニケーションがどうしても薄くなります。全ての地域でグローバル人材の育成が必要かは分かりませんが、本校のように、特色づくりの一環として各地域の1校にA L Tを集中させることも、1つの方法ではないでしょうか」

Hinkinson先生は、英語教育で重要なのはInteractiveであり、Communicativeであることを強調する。

「A L Tが、Open your textbook to page 10」と指示しても、その後に日本人の先生が『教科書の10ページを開けて』と言ったら、生徒はその日本語を待ち、A L Tの言葉には耳を傾けようとはしなくなります。実はこの小さな積み重ねが大きいのです。日本の先生は勉強熱心です。工夫をすれば、A L Tを活用して、生徒同士が英語で話し合ったり、意見を言い合ったりする活動をもっと取り入れられると思います」

小学校5、6年生では11年度から外国語活動が始まり、生徒は英語や国際理解の素養がある程度、身に付けて中学校に入学してくる。そうした意欲や素養を、生徒たちの将来を見据えながら3年間でどう伸ばしていくのか。松濤中学校の取り組みにヒントがあると見えそう。

*プロフィールは2013年3月時点のものです